

今週の為替相場見通し(2025年10月14日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		149.05 ~ 153.29	151.19	149.50 ~ 155.00
ユーロ	(ドル)		1.1543 ~ 1.1731	1.1615	1.1300 ~ 1.1650
(1ユーロ=)	(円)		174.75 ~ 177.92	175.67	173.50 ~ 176.50
英ポンド	(ドル)		1.3261 ~ 1.3489	1.3333	1.3150 ~ 1.3550
(1英ポンド=)	(円)	*	198.37 ~ 205.32	201.92	199.00 ~ 204.00
豪ドル	(ドル)		0.6472 ~ 0.6624	0.6472	0.6450 ~ 0.6600
(1豪ドル=)	(円)	*	97.58 ~ 100.95	97.89	98.00 ~ 101.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 高梨 杏光

(1)今週の予想レンジ: 149.50 ~ 155.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

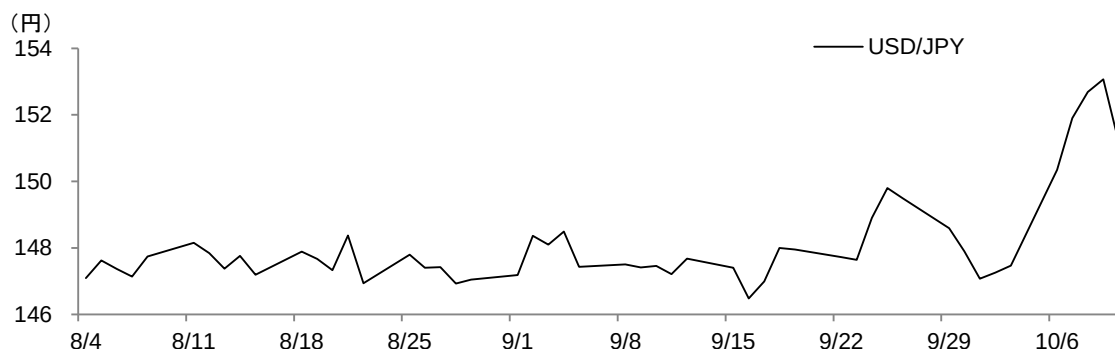
先週のドル/円は底堅く推移した。週初6日、149.58円でオープンしたドル/円は、先週末の自民党総裁選で高市氏が勝利したことを背景に円全面安となり150円台前半まで上昇。7日、加藤財務相の「為替市場における過度な変動を見極めていく」との発言から一時150円台前半まで下げたが、米9月NY連銀1年インフレ期待が予想を上回り152円丁度付近まで反発。8日、153.00円まで続伸後152円台前半まで下押ししたが、FOMC議事要旨で大幅利下げに慎重な姿勢が確認されると152円台後半まで反発。9日、152円台前半ばでもみ合い後、ドル買いフローで153円台に乗せた。海外時間は、高市氏が円安けん制発言をしたことで、152円台前半に急落する場面が見られたが、すぐに買戻しが入り10日にかけて一時週高値153.29円を付けた。その後、公明党が自民党との連立政権を離脱方針と報じられると152円台前半ばまで急落。海外時間では、トランプ米大統領が対中国に100%の追加関税を課すとの考えを示したことから151円台前半まで続落し、151.19円で越週した。週明け13日は米中貿易摩擦緩和への期待から、152円台前半ばまで上昇した。

今週のドル/円は日米の政局の動向で上下する展開を予想。先週末、本邦では公明党が26年続いた自民党との連立体制から離脱を表明した。首相指名の臨時国会に向け、今後自民党は野党との共闘を探る動きとなるだろうが、実現の可能性が高まれば財政拡張への懸念から円売りが強まると想定される。高市氏は報道番組にて、「行きすぎた円安を誘導するつもりはない」と円安牽制発言をしたが、市場の反応は一時的なものにとどまっている。心理的節目である155円を超えた場合には、本邦為替介入の警戒感が高まる展開に留意しておきたい。また、米国では一部政府機関閉鎖について再開の目途が立たない中、中国のレアアース輸出規制への対抗として、11月1日から対中国に100%の追加関税を課すと発表。米政府運営や関税交渉の先行き不透明感が強く、リスクオフでドル/円の上値は重いと予想されるも、進展となればドル買い材料となるだろう。今週本邦では、田村日銀審議委員、内田日銀副総裁の発言が予定されている。直近では両氏とも、利上げに前向きなタカ派姿勢を示していたが、本邦の政局を踏まえて発言内容に変化が見られるのかに注目が集まる。また、米国ではパウエルFRB議長を始めとして、複数のFRB高官の発言が予定されている。米経済指標が発表されない中、今後の金融政策スタンスに関する発言が出た場合には、ボラタイルに反応する可能性があり警戒しておきたい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(10/6~10/10)の値動き:

安値 149.05 円 高値 153.29 円 終値 151.19 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第二チーム 伊藤 基

(1) 今週の予想レンジ: 1.1300 ~ 1.1650 173.50 ~ 176.50 円

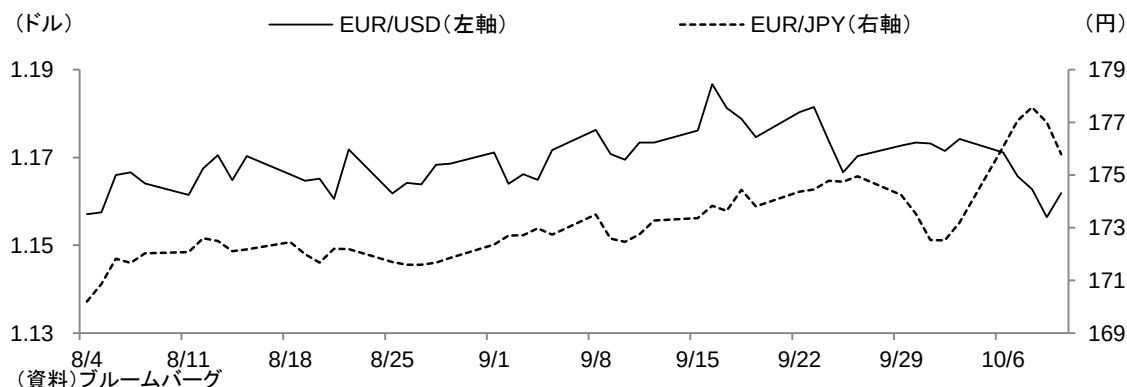
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロドル相場は、週後半まで軟調な推移が続いたものの、週末には米中貿易紛争を巡るヘッドラインからやや値を戻す展開となった。週初のユーロ/ドル相場は、1.17台前半からスタート。フランスのルコルニュ首相が辞任するとのヘッドラインを受けて、フランス政局が一段と混乱する懸念などからユーロ売りが強まる場面が見られた。ヘッドライン消化後は、米金利低下を材料に幅広い通貨でドル売りが進む中、下げ幅を徐々に縮小させた。しかし、フランス政局に対する市場の先行き不透明感は根強く、週を通しての主要なユーロ売りの材料となった。7日は、フランス国債の利回りが上昇するのを横目に1日を通して一本調子でユーロは下落する展開。8日についても、アジア時間から売りが優勢な値動きとなり、9日には米長期金利の上昇を背景にドル買いの流れが広がる中で、8月上旬以来、約2か月ぶりの水準までユーロ安が進行する場面が見られた。一方で、週末となる10日は、トランプ米大統領が11月1日から中国からの輸入品に対して100%の関税を課すとの方針をSNSで発表。米中対立が再び激化する可能性が強く意識され、幅広い通貨に対してドル売りの流れが強まる中で、ユーロも買い戻され、1.16台前半まで値を戻した。

今週のユーロ/ドル相場は、軟調な推移を予想。今週もフランス政治を巡る先行き不透明感がユーロ売りの材料となりそう。週末にフランス大統領府はルコルニュ首相の新内閣を発表したもの、主要ポストの顔ぶれを見ると前回から変りばえない布陣となっており、野党の協力を得られる可能性は低いだろう。仮に協力が得られたとしても野党側に大きく譲歩せざるを得ない状況であるだけに、フランス政治の混乱状況が続くことになり変わりなく、ユーロ売りが優勢な時間帯が長く続くであろう。一方で、米中対立の激化懸念から週末はドル売りユーロ高が進行していたものの、その後の両国の動向を見ると、双方ともに対話自体は続ける様子が示された。水面下を含め、二国間での交渉が続いている限りにおいては、事態が短期的に一段と悪化しないと見ており、先週末からのドル売りも継続しないであろう。フランス政局を材料とするユーロ売りが継続すると同時にドル売りの流れが一服する中では、ユーロ/ドル相場には下落圧力がかかりやすいと見ている。フランス政局および米中対立以外での、今週の主な予定としては、14日(火)に独10月ZEW景況感指数、15日(水)にユーロ圏8月鉱工業生産、16日(木)にユーロ圏8月貿易収支、17日(金)にラガルドECB総裁の講演などが予定されており、結果や発言内容によってはユーロ/ドル相場にも影響を与える可能性があるだけに一定の注意を払いたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/6~10/10)の値動き: (対ドル) 安値 1.1543 高値 1.1731 終値 1.1615
(対円) 安値 174.75 高値 177.92 終値 175.67



3. 英ポンド

欧州資金部 神田史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3150 ~ 1.3550 199.00 ~ 204.00 円

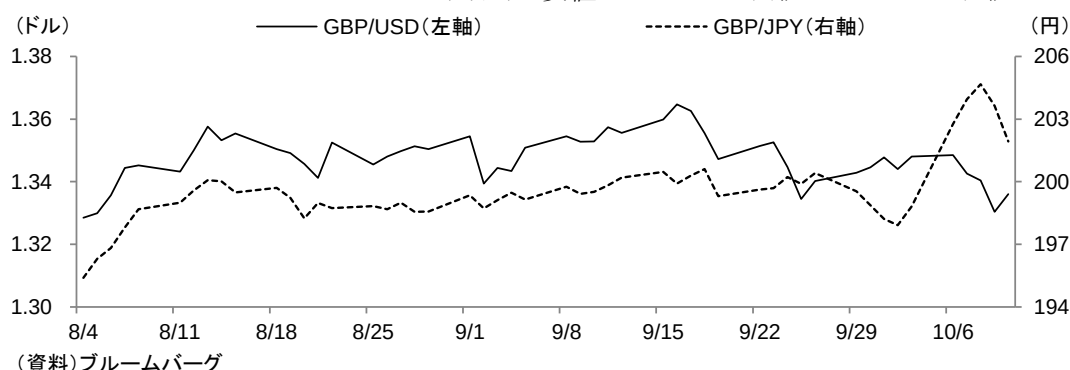
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は若干の下落。週を通して、仏政局を受けたユーロ安圧力と自民党総裁選後の円安圧力を背景にドルが堅調だった。週初6日は1.34台で始まる。仏首相の突然の辞任報道でユーロが下落する中でドル買いが強まると英ポンドは上値重い。下値は限定的ながらそのままずると値を下げ、週末10日には1.33を割り込んだ。英ポンドは対円で上昇。自民党総裁選の結果を受けた円安で、週初6日に201円台後半で始まる。ドル/円の上昇が続くのに連れて、8日には205円台まで上昇。10日には自公連立の瓦解が報道される中、203円を割り込んだ。

今週の英ポンド相場は、上値重いながら堅調推移継続を見込む。先週は英側からの材料が特段見られない中でドル主導の相場展開だったが、英ポンドの下落は限定的だった。英指標面からは14日(火)に英8月までの雇用統計、16日(木)に英8月鉱工業生産、英8月GDP(単月)などが発表となる。とはいいつつも、個人的にはグローバルなリスクセンチメントに注目している。株式市場や貴金属市場の上昇にやや短期的に高値警戒感が出てきていることもあり、それら起因のリスクオフで英ポンドに下落リスクがあることに留意したい。13日(月)は米休場で、14日(火)に米金融機関の決算発表が始まるため、米株式市場の動きを注視。なお、オプション市場で観測されるインプライド・ボラティリティは今週の対ドル変動を1%程度、対円では約2円幅の変動を見込んでいる模様だ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/6~10/10)の値動き: (対ドル) 安値 1.3261 高値 1.3489 終値 1.3333
(対円) 安値 198.37 高値 205.32 終値 201.92



4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 0.6450 ~ 0.6600 98.00 ~ 101.00 円

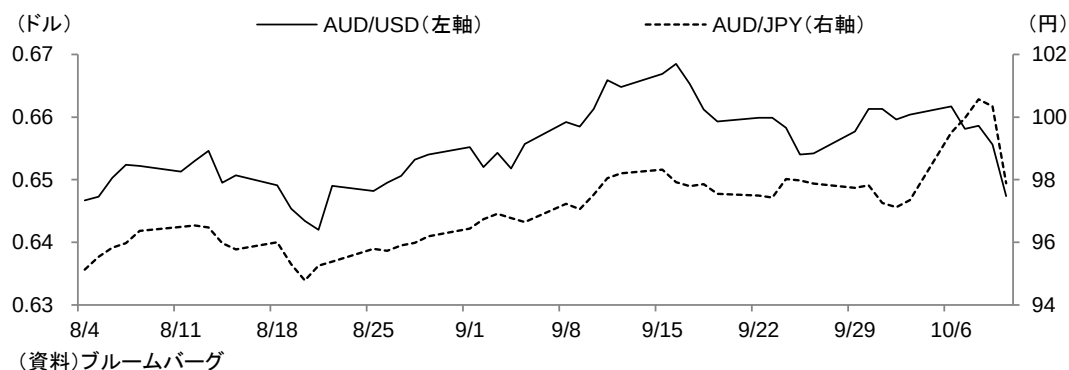
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは週末に下落した。6日の豪ドルは0.6595でオープン。シドニー市場休場の中、オープン直後は自民党総裁選挙で高市氏が勝利したことを受けた円売り圧力からドルが上昇し、豪ドルは一時0.6600割れまで大きく売られた。しかし、クロス/円主導で豪ドルは0.66台まで反転上昇し0.6618で引けた。7日は、円安トレンドが更に加速しドル/円が150円台を突破して上昇する中、クロス/円も総じて上昇し、豪ドル/円は100円台まで上値を更新した。また、豪ドルは豪ドル/円の上昇に連れて、高値圏でもみ合いとなり一時週高値0.6624まで上昇するも、海外時間は、ドルの上昇に押されてやや軟調な推移となり、0.6579まで反落して引けた。8日は、東京時間にRBNZが経済成長率の鈍化に備え▲50bpの大幅利下げに踏み切りサプライズ、必要であればさらなる追加利下げを辞さないスタンスも示したことでNZドルが大幅安となる流れに豪ドルもつれ安となったが、一服後は0.65台後半にて小動きの展開。海外時間には9月FOMC議事要旨がリリースされたが影響は限定的。対円では、円安トレンドが継続し、100円台後半まで上値を伸ばした。9日は、材料難の中、豪ドルはじり高となり0.6610まで上昇。海外時間は、0.65台後半まで一時反落するも、再び上値トライの展開となり0.6612まで買い戻されたが、ドル/円が大幅に円高に振れる場面では豪ドル/円の下落に連れて0.6540まで急落。一服後は、0.65台半ば付近で引けた。豪ドル/円は一時101円目前まで上昇したが、先述の円高の急伸により100円台前半まで反落した。10日の豪ドルは底堅い推移が継続したのち、米国が対中関税の大幅引上げを検討していることが分かり、対ドルでは一時週安値となる0.6472まで、対円では97円台後半まで大幅下落となった。週明け13日は下落一服。米中通商交渉が継続されることが分かり安心感から、豪ドルは対ドル・対円でやや買い戻されてクローズした。

今週の豪ドル相場はもみ合いを予想する。9月RBA会合では政策金利が据え置かれ、追加利下げが見送られるとともに、豪6～9月期のインフレ率が市場予想より高くなる可能性が指摘された。これにより、次回11月RBA会合での利下げ織り込みは低下し、豪ドル相場は下支えされている。RBAはデータ重視の方針を示しており、10月後半に豪6～9月期CPIが発表されるまでは豪ドル相場が下支えされる展開が継続すると考えている。一方で、先週末に米国が対中関税の大幅引上げの方針を示したことで、豪ドルは大きく下落した。週明けには交渉継続の方針が示されたことで下落も一服しているが、交渉期限の11月1日(土)まで交渉の進捗状況に関するヘッドラインなどに相場が振られる展開が継続するだろう。また、今週は、14日(火)豪9月RBA議事要旨、16日(木)豪9月雇用統計の発表が予定されている。現在の豪ドル相場が9月のRBA会合の結果に支えられている面が大きい。また、9月議事要旨の発表は市場の解釈を確認する場となるだろう。また、前回8月豪雇用統計では雇用者数減に反転し労働市場の緩やかな軟化の兆しが見られた。豪9月雇用統計では豪雇用環境に悪化の兆しが出ているか改めて確認したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/6～10/10)の値動き: (対ドル) 安値 0.6472 高値 0.6624 終値 0.6472
(対円) 安値 97.58 高値 100.95 終値 97.89



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。